

会長挨拶

矢内 大丘

本格的な春の訪れを感じさせる日が続いておりますが、県内御寺院の皆さまには平素より青年会活動にご理解ご協力いただきまして誠にありがとうございます。心より御礼を申し上げます。また、青年会会員各位におかれましては、コロナ禍において感染拡大防止のためいろいろと制限せざるを得ない状況下での青年会活動にご協力いただきまして感謝申し上げます。この場をお借りいたしまして御礼申し上げます。

本年の三月十一日で東日本大震災から十年を迎えた。

マグニチュード9.0というあの未曾有の巨大な地震とそれに伴つて発生した大津波、そして福島第一原子力発電所の爆発事故。私自身、原発事故により被災し避難生活を送らざるを得ませんでしたが、改めて、この十年の來し方を考えば、十年

たちまちに過ぎてしまったという思いと、あれからまだ十年しか経過していないのかという、相反する思いの中で、ただ懼れぞして茫然としてしまいます。

震災から十年という節目の本年二月十三日、マグニチュード7.3、最大震度6強の余震が発生し各地に大きな被害が生じました。被害に遭われた多くの皆様に対しまして心からのお見舞いを申し上げます。震災から十年の間、東北地方や福島県は地震、水害、風雪害など毎年のようにどこかで大きな災害に見舞われています。被害に遭われた方は「天災なのですから……」とはおっしゃいますが、なぜこんなに苦しまなければならぬのでしょうか。割り切れない思いが澱のように残ります。あの震災以降、たとえ楽しいことがあったとしても、心の底から喜べないような苦い思いも一緒に感じています。

確かに震災から十年という年月が経ちました。そしてこれらも年月は続いていきます。これから行く末を思えばいつもどうしたらしいのかと私自身悩んでいますが、あえて言えば、同じ場所に住み、同じような悩みを抱える福島県の



東日本大震災から十年

定林寺住職 高森正純

忘れない・忘れてはいけない出来事…

平成二十三年三月十一日午後二時四十分、未曾有の災害「東日本大震災」が発生いたしました。地震・大津波・そして東京電力福島第一原子力発電所の事故は、私たちの生活が一変させられるものでありました。

当時は、県内外から安否の確認をしたり、今後の活動の連絡を取り合つたりして携帯電話が熱くなるまで話をしていたのを記憶しております。

当時、私は福島県青年会の会長職に就いており、大震災以来、各地避難所への炊き出し、避難所・仮設住宅での行茶活動等、復興へ向けてのボランティア活動を行つてまいりました。

「少水の常に流れて石を穿つが如し」僕かな水でも、常に絶え間なく流れ続けるなら、成らぬことは何もない！我々のできることは極々小さいことかもしれません、続けることにより必ずこの困難から脱することができる！という思いの元、青年会会員一丸となつて活動いたしました。

四月には、相馬市慶徳寺様にて震災物故者の大練忌法要、六月には新地町総合体育館にて卒哭忌法要に随喜させていただきました。

また、中通り浜通りでは、放射能の影響に



『正法眼藏隨聞記』の中に、「海中

より子供たちが外で遊ぶことができず、プールに入ることもできない状況であるため、夏休みを利用して「会津で遊ぼう！」と題し、小学生を一泊二日で会津へ招待いたしました。

震災翌年の三月十一日には、いわき市海嶽寺様にて一周忌並びに復興祈願法要が行われ、春のお彼岸には、避難指示区域でお墓参りにも行けず仮設住宅生活を余儀なくされている方々の先祖供養を、郡山市金昌寺様にて執り行いました。

そして、任期最後の青年会総会の際に、當定林寺にて「震災復興祈願法要」を厳修して私の会長の任期を終えました。

当時、御自坊や地元地区が被災されているにも拘らず協力していただいた会員もたくさんいました。紙面をお借りして、あらためて感謝を申し上げます。ありがとうございました。

さて、今年二月十三日午後十一時〇八分、東日本大震災の余震とみられる最大深度6強の地震が発生いたしました。津波は起きなかつたものの、十年前よりも被害が大きかつた地区もあったようです。また、余震は今後も続くとの見解がありますので、常日頃から災害に対する備えをしておくことが大切でありましょう。

最後に、震災の一日も早い復興と、原発事故の収束、そして青年会の益々のご繁栄と会員各位の益々のご健勝をご多幸を祈念申し上げます。

僧侶であるからこそ、ともに悩み、寄り添つていけるのではないかとも思うのです。そしてそれが求められているのではないでしょうか。私たち僧侶一人一人が未来へ向かって、心にひとつ明かりを灯し、そして皆一緒にその明かりを灯し続けてけば、いずれは大きな灯火となり、やがては人々の心の道を照らす灯台となると信じています。

最後になりますが、私の住む川内村とゆかりの深い詩人、草野心平の「道」という詩を紹介させていただきたいと思います。今のような困難な状況にこそ読んでいただきたい詩です。

いくどもいくども空きあたり。
真空園にめりこみ。
いくどもいくども。
よろよろよろけ。
たちあがり。

いくどもいくども空きあたり。
真空園にめりこみ。
いくどもいくども。
よろよろよろけ。
たちあがり。

道

ああその果てに。

己れの過信にどきりとし。
行はざるもの。
それは錯覚にすぎないと。

よろけなどとはずぶん立派なお話だと。
天日のもと泪し。

決意し。
そして新しく行かうとします。

わが行く道よ正しくあれ。
石ころごろごろたりともわが往く道よ大きくあれ。

『草野心平全集 第一巻』(筑摩書房、一九七八年、三六二頁)より

二・一 慰靈行脚

令和三年東日本大震災 慰靈復興祈願法要

十年の節目を迎える本年。今年は昨年より猛威を振る新型コロナウイルスの状況を鑑み、感染症対策として曹福青事務局でもある地元相双支部会員とO.B.の計六名にて慰靈行脚を行うこととしました。

今回団らざして少数での行脚。去る平成二十六年、相双支部有志で始めた第一回目の行脚を思い出します。当時はまだ慰靈碑も少なく、拝む場所を探しながらの行脚がありました。ある場所では壊れたかけた道路を進み砂浜で海に向かつて読経。ある場所では工事車両用の道路を通してもらい、又ある場所では壊れた家々や津波による瓦礫が風景であり、道端にお花や塔婆が置かれている場所を見つけ、読経したところもありました。

当時の道々の風景、読経した場所を思い返しながら、支部会員でリモートでの会議。

今年の集合時間や役割を確認。今回は、南相馬市千相院様に集合、

①南相馬市原町区菅浜地区慰靈碑

②南相馬市原町区下渋佐寄り添い地蔵

③南相馬市原町区鹿島地区慰靈碑

④相馬市原釜地区慰靈碑

⑤相馬郡新地町の釣師防災緑地公園内慰靈碑

釣師防災緑地公園内慰靈碑

この五箇所を順に周りました。

当日は、前日の強風が嘘だつたかのように穏やかで、雲一つない青空。お参りに来られた方々と共に、澄み渡る空の下で供養をすることができました。

無事、最後の行脚場所を後にし、例年のようにマイクロバスも無いので各々現地解散。十二時を少し過ぎ、帰り道に道路の凸凹や亀裂があり、帰り道に道路の凸凹や亀裂が気になります。駅前に山積みのゴミにも目が止まりました。これは、去る二月十三日に発生した福島県沖地震の灾害ゴミ。新地町では半壊や一部損壊の住宅被害が、少なくとも千三百棟に上ります。山積みの瓦や壁材、家電、木材、コンクリート。改めて震度6強の凄まじさを感じました。町内各地区の墓石被害も多數あり、「十年前に直したのにまた同じだ。」と今後の余震にも不安を抱える方も少なく無いと感じます。震災から十年が経ちましたが、これからも三・二慰靈行脚を通して、人々の不安や悲しみに少しでも寄り添っていきたいと改めて思うところがありました。

(斎藤紹俊／記)



①南相馬市原町区菅浜地区慰靈碑



②南相馬市原町区下渋佐寄り添い地蔵



④相馬市原釜地区慰靈碑



⑤相馬郡新地町の釣師防災緑地公園内慰靈碑



③南相馬市鹿島地区鳥崎地区慰靈碑

皆様ご存知の通り、平成二十三年（二〇一一年）三月十一日十四時四十六分は、福島県に生きる私達にとって生活を一変させる大きな自然災害でした。

本年は、震災発災より十年目という節目の年ではありますが、新型コロナウイルス感染拡大防止として、曹洞宗福島県青年会では、県全体での法要は行わず、個々に行うということになりました。

全日本仏教青年会、全国曹洞宗青年会、世界仏教徒青年会連盟共催による東日本大震災慰靈復興祈願法要を伊達市成林寺さまにある納経塔前にて発災の前日である三月三十日に各団体代表者である谷晃仁全日仏青理事長、原知昭全曹青会長、村山博雅△

F-B△会長及び全国曹洞宗青年会現地役員である、村上徹信国際委員長、内藤宏信支援部アドバイザー、中野孝海庶務並びに隣県の役職者にて厳修されました。

成林寺さまに建立された納経塔は東日本大震災活動の一環として、平成二十五年三月三十日、全日本仏教青年会主催・全国曹洞宗青年会主管により福島市音楽堂にて開催された三回忌追悼慰靈・復興祈願法要では、この納経塔が祭壇中央に奉祀され、千名の地元の皆様方と二百名の全国から集まった青年僧侶より祈りが捧げられました。その後、発災より二年の間、支援活動の拠点となり、全国曹洞宗青年会災害復興支援現地本部が設置されたこの成林寺さまに物故者追悼慰靈並びに被災地早期復興祈願の想いを込めて安置されました。

法要では、全国よりお寄せ頂きました、二千枚を超える写経を納経し、オンラインで繋がった五十名を超える参加者と共に東日本大震災物故者諸精霊に供養の誠を捧げ、被災地の早期復興、新型コロナウイルスの悪疫退散を祈願致しました。

「共に悼みます 失われた命を
共に祈ります 別れた命の安らぎを
共に忘れません その輝いていた命を
共に縁り添います 同じ命を生きる証に」

と、その納経塔脇に刻まれた東日本大震災鎮魂の誓いは、十年を経た今もそれぞれ、様々な出来事と共に、その想いを折々に思い出させてくれます。

東日本大震災・東京電力福島第一原発事故から、十年という道のりは苦悩と困難の道のりでした。現在でも立ち入りを制限されている地域では、その当時のままの景色が広がり、また、沿岸部では、真新しい防災緑地と更地になつた宅地が点在しております。

十年前までそこには生活があり、今も避難し帰ることができない人がいるという、現実をまざまざと見せつけられてしまいます。ともに悼み、ともに祈り、ともに寄り添い、そして、私たちができる事を模索していくながら、ともに歩んでいきたいと考えさせられました。



オンライン
法要は
こちらから
見れます





梅花流のすすめ

瀧谷寺 住職 島村 宗親



の糧になるかと思ひます。誰もが最初は初心であり、勿論得意不得意もあります。自分の好きな、興味があることから入っていいのです。長けていることは皆で共有し、苦しみは皆で分かれ合う。唱え、学び、会話しながら少しづつ深めたいことを見つけて下さい。

私事で言えど歌が好きです。聴くのも歌うのも好きです。御詠歌より好きな歌は違うし、ましてや読経とは全く別物だときです。

自分の経験で言えば以前は法事でお唱えする御詠歌とカラオケで歌う好きな歌は違うし、と思っていました。勿論根本的に違うのですが、音楽的観点からみれば共通することが多々あります。そして、いずれも声を出す、奏てる側がいて、聴き手もいるということです。大切

なのはそこでは無いのは当たり前ですが、そこも外せないし、欠かすこともできないのです。

私は御詠歌の練習の中で、いざれも呼吸リズムに乗せて声を出す共通点に気付き、講習で学んだ声楽、布教をカラオケも読経にも活かすことで、志や意識、意義を持つ、変えることで見えてきたものや得られたことが多々ありました。それぞれ思ふ心は違えど分け隔てなく行づることを。

「その声に仏まします」御詠歌、読経は経験に培われた教えを、誓いを、願いを皆様の声に出す、仏声です。私は歌からこのようなことを学びました。

と、ここまで自分なりの思いを述べさせて頂きましたが、一番皆様に申し上げたいのは

「皆で話をしようよ、皆でコーヒーでも飲もうよ、ちょっとくら

コロナ禍の世情により、皆様も何かとご苦労をされていると思います。生活様式も様変わりし、当分は自粛と周りに配慮した日常を送らざるを得ません。

梅花流の現状でもコロナ禍の現状により昨今の諸問題に拍車をかける状況にあります。高齢化や講員の減少等は宗門でも深刻な問題になっておりますが、福島県においても例外ではなく、特に宗門僧侶と寺族の梅花流への不参加が深刻な問題です。

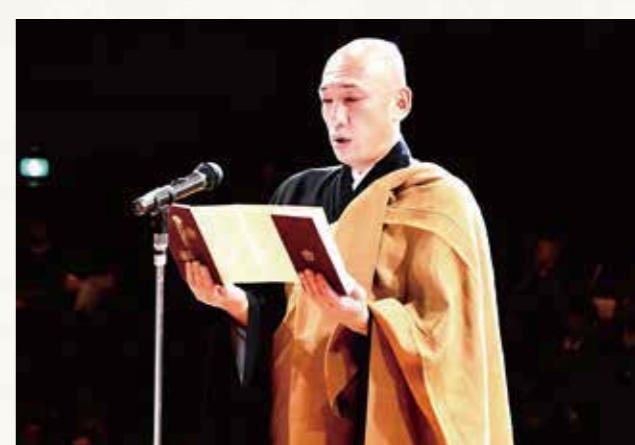
結論から申し上げると「様々な可能性を先入観から潰さないでほしい」ということです。

梅花流は仏讃歌であり、信仰や布教と切り離すことはできませんし、歌である以上音楽的要素も多く含んでおります。布教・信仰面と歌唱面どちらかに固執してしまえば本来持つ両方の良さが薄れます。つまり、宗教者として歌い手として絶え間ない研鑽が必要となります。単純にこの話を聞くだけでも「面倒臭い」「大変そう」でしたが、「やらない」というのが本音だと思いますし、多分メリットとデメリットを天秤にかけでも手を出しづらいのが梅花流かと思います。

しかし、布教において自分の

引き出しは増えますし、歌も上手になります。人脉は広くなりますし宗門や自坊の垣根を超えた檀信徒の皆様との交流や関係も深まります。お気付きかと思いますが、日頃の読経や鳴らしもの等も音程・リズムがあり音楽要素を含んでおります。元々私たちにとって音楽的因素は切り離せないものであり、そういう観点から見ても

引き出しは増えますし、歌も上手になります。人脉は広くなりますし宗門や自坊の垣根を超えた檀信徒の皆様との交流や関係も深まります。お気付かかと思いますが、日頃の読経や鳴らしもの等も音程・リズムがあり音楽要素を含んでおります。元々私たちにとって音楽的因素は切り離せないものであり、そういう観点から見ても



多くのメリットがあります。先には努力・物事を成就させるのはあるのです。

勿論、物事を成就させるのはありません。苦労は避けることはできませんし、梅花流も例外ではありません。そういったことはデメリット、弊害になるかもしれません。布教が苦手、人付き合いが面倒、音楽的要素がある以上そもそも音楽が苦手な方や興味がない方は始めようとは思わないでしょう。

しかし、何かの可能性を引き出したい、見出したいのであれば先入観を抑え、是非足を踏み入れて頂きたいと思います。同志の有難さや大切さ。集団行動の分け隔てを持たず、宗門の教義や経験。釈尊の教えでもある等、とっくに知りながら今更改めて思う様々なことが宗門僧侶として人として必ず皆様

面倒くさい、辛い、自他に腹が立つ時も多々あります。しかしこの歳になつても学生時代のような環境があるのは、また経験できるのは有難いし、良い意味で若返ることができる貴重な場です。

本会報をご覧の皆様も、梅花流という仏縁にて是非多くの人達に出会つて下さい。また私自身も一人でも多く出会えることを楽しみにしております。

会報編集委員会WEB会議を経て

会報編集委員会 廉務 白石龍一

の急増に伴い、セキュリティの脆弱性が問題点として指摘されています。コストとセキュリティという点を考慮すると、WEB会議で複数名同時使用する場合においては、Zoomを一般で導入するには敷居が高い印象があります。その点において前述のLineとGoogleアカウントの併用は、確かに二つのサービスを同時に利用する手間はありますが、どちらも普及率が高く、また基本無料で使用可能という大きな利点があります。加えてサービス提供から時間経てセキュリティが都度改善されていると

一、はじめに

昨年四月に発足した令和二・三年度の会報編集委員会ですが、早期の段階より新型コロナウイルスの感染リスクを考慮し、事務局長発案の下で無料通話アプリとオンラインのオフィスソフトを利用したWEB会議を取り入れて製作・出版に取り組んできました。はじめにその具体的な手段方法と、現在普及しているWEB会議サービスについて紹介します。そしてコロナ禍がもたらした社会とコミュニケーション様態の変化は、今後お寺へどう影響するのか一考察を述べたいと思います。

二、WEB会議を導入した

『精進』の編集について

会報編集委員会に於いては無料通話アプリLineと、Google社がオンラインで提供している無料のオフィスソフト、並びに同社のクラウドストレージサービスを使用しています。はじめにこれらのオンラインサービスについて説明します。Lineはスマートフォンにおける無料通話及びメッセージアプリとしての用途が主ですが、パソコン上においても無料で複数名による同時通話が可能です。パソコン、タブレット、

接続環境があれば誰でもビデオ通話を簡単に使うことが出来ます。このビデオ通話を使用しながら、無料で開設できるGoogleアカウントを共有し、通話テキストを編集・共有することで、ソーシャルディスタンスを保ちながらも互いの顔を見ながら作業することが可能となります。

スマートフォンといったデバイスとインターネット接続環境があれば誰でもビデオ通話を簡単に使うことが出来ます。このビデオ通話を使用しながら、無料で開設できるGoogleアカウントを共有し、通話テキストを編集・共有することで、ソーシャルディスタンスを保ちながらも互いの顔を見ながら作業することが可能となります。

スマートフォンといったデバイスとインターネット接続環境があれば誰でもビデオ通話を簡単に使うことが出来ます。このビデオ通話を使用しながら、無料で開設できるGoogleアカウントを共有し、通話テキストを編集・共有することで、ソーシャルディスタンスを保ちながらも互いの顔を見ながら作業することが可能となります。



三、他のWEBサービスについて

前述したサービス以外にも、各社がさまざま形でリモートツールを提供しております。Microsoft社が提供するTeamsは、ビジネスの場において利用が



五、おわりに

良きお寺の伝統の両方を適切に調和させることができることを必要かもしれません。

拡大しており、企業内外での会議に導入するケースが増えています。Google社においては、以前よりGsuiteというサービスを企業・大学ドメインに提供していましたが、二〇二〇年下半期にGoogle Workspaceと名称を改め、従来のサービスを強化して他社のサービスに対抗しています。宗門の教育研究機関である駒澤大学では、このGoogle Workspaceを利用しておりモート授業を実施しています。コロナ禍の端緒より一年余り経た現在、先に挙げたサービス以外にも様々なコミュニケーションアプリが各社から発表されておりますが、今後も激しい市場競争が予想されている分野ですので、更なる利便性の向上とサービスの普及が期待されます。私たちユーザーにとっては、コロナ禍以前に比べてWEBサービスの選択肢が拡大したこと、各人が所属する企業・団体や自身のネット環境を踏まえた上、自身に最適なリモートツールを選択することが可能となりました。

四、お寺に波及するリモート化

現在はリモートワークが一般化し、企業や学校、あるいは役所や病院といった場面で当たり前に導入されています。それはお寺の行持や布教、青年会の活動もまた例外ではありません。リモート法要という形式で檀信徒の回忌供養をお勤めする御寺院さま、或いはオンラインでの坐禅会、また或いは全国曹洞宗青年会主催のWEBセミナーのように、我々僧侶の身近にもリモート化の波は少しづつ広がっております。コロナ禍の厳しい状況の中、お寺におけるWEBサービスを用いた法要や布教活動は、

この新しい形式はお寺と縁遠くなりがちな若い世代に訴求する有効な手段となり得ます。特に福島県においては檀信徒の高齢化が進み、その子どもや孫世代は世帯主とは別の、菩提寺と離れた土地を生活拠点としているケースが珍しくありません。しかし一方で、急激な「デジタル化」は非デジタル世代を置き去りにする危険があります。多くの御寺院さまにおける檀信徒の中心世代は高齢者層であると推察します。その世代にとつてはリモートワークもWEBサービスも縁遠い事柄です。リモート方々を減らす可能性があります。リモート法要が普及した場合、法事はオンラインで済ませればいいと考えるお施主さまが増えてしまいかねません。既に「墓参り代行」サービスがビジネスとして存在する以上、そのリスクがあると言えます。

いずれにせよ、アフターコロナは若い世代にお寺を知る機会を作りながら、同時に高齢世代にも付き合いややすいお寺を維持しなければならない難しい時代です。この課題は御寺院さまそれぞれ取り巻く社会においても、高齢世代には従来通りの丁寧なお付き合いが必要となることが予想されます。また過度なデジタル化は実際にお寺へ足を運ぶ方々を減らす可能性があります。リモート法要が普及した場合、法事はオンラインで済ませればいいと考えるお施主さまが増えてしまいかねません。既に「墓参り代行」サービスがビジネスとして存在する以上、そのリスクがあると言えます。

世間ではテクノロジー分野がコロナ禍をものともせず加速度的に進化しています。GAFAを中心とする巨大アーテック企業がけん引するNASDAQ100指数は、コロナショックによる暴落を経験したにもかかわらず七月に最高値を更新し、アメリカ大統領選後は更に上昇しました。今後、情報技術分野は益々発展し、コミュニケーションの様態は更に変化し続けることが予想されます。一方でお寺は今日まで重視し、祖師方の教えを相承してきた宗門にとっては、本質的には世間の変化はあまり重要ではありません。しかしながらコロナ禍により、社会はリモート化という大きなパラダイムシフトを迎えました。我々の不立文字、教外別伝の仏法は言葉を超えた境地にあります。思考とコミュニケーションにおいては、やはり言葉に頼らざるを得ません。安易に新しいテクノロジーを迎えることのない、「新しい生活様式」における衆生教化と対話のあり方、それを見つけることが今後の課題であると考えます。幸いにも我々は青年会という善知識に恵まれております。リモート時代におけるお寺の今後にについてご意見いただければ幸いです。

合掌

支部だより

県北

新型コロナウイルス感染拡大が続いている影響で、予定されていた両祖忌、成道会、歳末助け合い托鉢等の行事は全て中止となり、事務局会のみ開催致しました。今後の活動も感染の状況を鑑みて判断することとなりそうです。

十一月二十八日、当支部会員の春日顯光師と瑞葉様が、安養寺様に於いて仏前結婚式を挙式されました。誠におめでとうございます。

お二人の今後の益々のご活躍が期待されます。



県中

令和二年十月二十八日と十一月二十五日に郡山市大慈寺様に於いてカレンダー入金状況の確認を新型コロナウイルス対策を徹底し行いました。今尚、感染者が増え続けている中で年間事業や新年会といった

親交を深める場なども含め行う事が困難な状況にあります。これらの状況を加味し新たな試みとして二月十八日に新年会をオンライン形式で行いました。そこで、二月十三日に起きた福島・宮城地震の被災状況の確認も行いました。



県南

今年は予定していた行事も軒並み中止や延期となり、事務局会の実施も困難を極めました。

五十年の歴史を誇る「緑蔭禪の集い」も中止せざるを得ない状況であり、お子さんを対象にした「布教」の場が失われた事は非常に歎がゆい想いを感じる瞬間でした。しかし再び子供達の笑顔が見られる日が来る事を願い会員一同精進して参ります。

十二教区・光渡寺の大平雄介師が華燭の儀を執り行いました。コロナ禍の中飛び

十二月十三日、福島県沖を震源とした地震により、支部会員各寺院において本堂・墓地等大きな被害を受けました。一月三十一日、支部会員でリモート会議を行いました。今年は感染症対策として、震災慰霊行脚を地元である相双支部会員で行うにあたり、集合場所や持ち物、配役等を再確認しました。その他例年、支部会員で坐禅会手伝い等があまりましたが、今回は活動を自粛させていただきました。



いわき

令和二年十二月六日、会津若松市で、福島県曹洞宗青年会会津支部による毎年恒例となっています歳末托鉢が行われました。

今年度は、コロナ禍ということもあります。参加者全員マスク着用の上、消毒液を用意し、例年とは一部ルートを変更して行い、事故やケガもなく無事に終えることが出来ました。

この様な、例年とは違う状況の中、貴重な浄財を御納め下さった方々に、感謝の意と、一日でも早い新型コロナウイルスの終息と世界平和を祈念いたしまして終りと致します。



相双

込んできた明るい話題に、会員一同心より祝福の気持ちを捧げさせて頂きます。

実施となりました。

来年度もワクチン接種の実施状況や事態宣言の発令状況を踏まえ、慎重に教化活動を計画・実施していくたいと思います。

会津

令和二年度退会者

県北支部 猿田 秀和
服部 悟由
三村 浩史

県中支部 安倍 宗寛

会津支部 佐藤 慶道
新國 秀光

いわき支部 岡田 俊宏
小林 隆宣
渡辺 則明
光英 覚法